



深尾京司・中村尚史・中林真幸編『岩波講座日本経済の歴史1 中世11世紀から16世紀後半』

桜井, 英治

---

(Citation)

国民経済雑誌, 220(6):97-102

(Issue Date)

2019-12-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041931>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041931>



深尾京司・中村尚史・中林真幸編  
『岩波講座日本経済の歴史 1 中世 11世紀から16世紀後半』

桜 井 英 治

国民経済雑誌 第220巻 第6号 抜刷

2019年12月

書 評

深尾京司・中村尚史・中林真幸編

『岩波講座日本経済の歴史1 中世 11世紀から16世紀後半』

岩波書店，2017年，320頁

桜 井 英 治<sup>a</sup>

本書は『岩波講座日本経済の歴史』全6巻シリーズ（2018年5月完結）の第1巻として刊行されたものである。本シリーズに先行するシリーズとしては、1988-90年に同じ岩波書店から刊行された『日本経済史』全8巻があり、本シリーズもそれを強く意識してつくられている。

本シリーズが『日本経済史』シリーズと大きく異なるのは、『日本経済史』シリーズが近世からスタートするのにたいして、本シリーズは中世からスタートする点である。これは些細なことのようにでいて、じつは大きな事件である。日本経済史の研究者には経済学部（の経済史）系と文学部（の日本史）系がおり、近世・近現代史では相互乗り入れが普通だが、古代・中世史はこれまでほぼ文学部系によって占められており、経済学部系の立ち入る余地はほとんどなかった。本シリーズが中世からはじめたことは、その独占状態を破る道を開いたという意味で画期的である。

古代・中世史への経済学部系研究者の進出を阻んできた原因のひとつに、読解に一定の習熟を要する史料の壁があり、それがそこに住まう文学部系研究者たちに一種の安堵感を与えてもきたのだが、異種間競争の少ないホモニアスな空間は、同時に島国に生息する在来種の弱さをその住人にもたらしていたかもしれない。刺激的な議論の乏しいぬるま湯状態、といったら少々厳しすぎるかもしれないが、とりわけ近年は、評者もそこに身を置く一人としてある種の閉塞感を覚えることはあった。

古代・中世の史料を読みこなすのは、たしかにたやすいことではないけれども、かといって特権的といえるほどにむずかしいわけでもない。この閉鎖的環境が案外脆いものであることを、じつは当の文学部系研究者たちが一番よく知っているのではなからうか。その点、本巻の編者や執筆者のなかに、出身は文学部でありながら、教鞭は経済学部でとっておられる方が多いのは特徴的で、こういう方々が今後も中継的役割をになってゆくことになるのだら

---

a 東京大学大学院総合文化研究科，sakura@fusehime.c.u-tokyo.ac.jp

う。そう遠くない将来、経済学部系研究者も自在に史料を読みこなし、古代・中世史研究にどんどん進出してくることはまちがいない。そして、それは基本的に望ましいことである。

もちろん、以上はことの一面であり、本シリーズが中世からスタートすることになった本来の理由はあくまでも学術上のものである。つまり、この間に中世にたいする評価が大きく転換したのである。前シリーズ『日本経済史』の第1巻が「経済社会の成立：17-18世紀」と題されていたように、かつては近代市場経済につながる「経済社会」（速水融）の成立は近世の出来事であり、それ以前は市場経済がいまだ全面展開をみせていない前「経済社会」として、経済学部系研究者にとっては研究対象外とみなされていた。それがこの間、年貢の代銭納制という制度的環境のもとで、中世後期には広汎な市場経済が展開していたことが学界の共通認識となった（ただしそれが近代市場経済に直結するかどうかはまた別問題であるが）。本シリーズが中世からスタートすることになったのは、直接にはこのような研究の進展をうけてのことである。

以下、本巻の目次と執筆者を紹介しよう。

## 序章

第1節 成長とマクロ経済（高島正憲・深尾京司・西谷正浩）／第2節 政府の役割（西谷正浩・早島大祐・中林真幸）／第3節 所得と資産の分配（西谷正浩・中林真幸）

## 第1章 労働と人口「人口と都市化と就業構造」（斎藤修・高島正憲）

第1節 問題の所在／第2節 人口史における中世／第3節 都市の発展／第4節 就業構造の変容／第5節 17世紀へ

## 第2章 金融「鑄造の自由と金融の自由」

第1節 中世貨幣——渡来銭の時代（本多博之）／第2節 中世の金融（早島大祐）

## 第3章 農業と土地用益「農民の定住化と土地の証券化」

第1節 中世の農業構造（西谷正浩）／第2節 中世における不動産価格の決定構造（貴田潔）／第3節 15～16世紀における土地売買の保証——民事も裁く権力の誕生とその後（早島大祐）

## 第4章 鉱工業「中世の諸産業」（鈴木敦子）

第1節 醸造業／第2節 製紙業／第3節 繊維業／第4節 鋳業／第5節 銃砲・弾薬業／第6節 近世への展望

## 第5章 商業とサービス「中世の交易」（綿貫友子）

第1節 中世社会構造の特質／第2節 貿易の諸相／第3節 国内商業の展開／第4節 交易の場と商品／第5節 近世都市へ

巻末付録 生産・物価・所得の推計（深尾京司・斎藤修・高島正憲・貴田潔）

このうち太字で示したのは各巻共通のテーマであり、全巻に同じタイトルの章節が配されているだけでなく、テーマ別に全巻をチェックする編集協力者が置かれている。まことに手の込んだつくりといえよう。これが各巻ばらばらの構成になることを防ぎ、読者が全時代を一貫した視点で見通すことを可能にしている（一方、章タイトル後半の「」内に記したものが本巻固有のタイトルとなる）。

序章は、「成長とマクロ経済」「政府の役割」「所得と資産の分配」という全巻を貫く3つの視点で中世を概観しており、おおむね本巻全体の要約にもなっている。ここでは新知見に富む第1節の「成長とマクロ経済」を中心にやや子細に立ち入ってみよう。

まず冒頭で、中世はおおむね成長の時代であったとする本巻の基本的立場が宣言される。学界では目下、中世の農業生産に関して順調な成長を想定する通説にたいし、停滞・縮小を主張する新説が対峙している状況にあるが、本巻は前者への支持を表明している。

次に人口については、730-1450年のW・W・ファリス推計（1450年の推計は960-1050万人）と1600年の斎藤修推計（1700万人）にもとづき、古代後半から鎌倉時代（11-13世紀）の段階では人口成長は停滞的であったが、室町時代に入ると成長がはじまり、戦乱と飢饉が頻発した戦国時代にも順調に成長を続けたとする。

物価と賃金については、主にJ・P・バッシノーらの研究（以下、Bassino et al. (2010) と略記する）に依拠しつつ、1390年まで徐々に下落していた京都の米価が14世紀末から15世紀前半に一時的な上昇をみせ、ついで15世紀後半から16世紀後半にかけて下降、そして16世紀末にまた上昇するという複雑な動きをみせたこと、逆に賃金は、いずれも米価下落期にあたる14世紀後半と、15世紀後半から16世紀後半の二度の上昇をみせたことが示される。

ついで農業生産量の推計に入る。まず15世紀の農業生産量については、東寺領山城国上久世荘のデータから全国の1人あたり生産量を1.35-1.58石と推定し、これに当時の推計人口960-1050万人を乗ずることにより1297-1659万石と推計する。これは需要側から導かれる数値ともほぼ整合するという。これ以前の12-14世紀については、同様の供給側からの推計結果（1150年の1人あたり農業生産量は1.53石）と賃金から割り出した需要側からの推計結果にもとづき、人口1人あたり農業生産量は古代後半から中世前半にかけて上昇し、その後一時的に停滞したとする。これにたいし、16世紀半ばから18世紀はじめにかけては、それまでおおむね一致していた需要側推計と供給側推計が大幅に乖離する事態が発生するが、その直接の原因は同時期の米換算賃金率が異常に高かったことにあるとする。

続いて上記の農業生産量から第一次部門全体の生産量が推計されるが、そのさい、林業・水産業の生産価格の農林水産業全体に占める割合が15.6%程度であったとする明治期初頭のデータが適用される。さらに同じ明治期のデータから導かれた関係式を適用することで、第一次部門だけでなく、一次資料のない第二次、第三次部門のシェアや成長率までもが次々と

推計されてゆく。そしてこれらの基本データをもとに以下の結論が導かれる。

- 1) 部門別シェアの変化としては、中世初頭には86-87%を占めていた第一次部門のシェアが中世を通じて次第に低下し、第二次、第三次部門のシェアがともに上昇するが、もっとも成長率が高いのは、中世における商業の発展を反映して第三次部門であった。
- 2) 成長率の推移は、鎌倉時代後期から室町時代（1280-1450年）にそれまでの停滞から脱出したのち、戦国時代から織豊政権期（1450-1600年）に加速するが、そこには流通経済の発展や、戦国大名の領国支配の進展に伴う生産拡大が寄与したとみられる。
- 3) 人口1人あたり GDP は、鎌倉時代中期以前（950-1280年）は人口の増減によって複雑な推移をみせたが、鎌倉時代後期以降はおおむね古代後期の停滞から脱し、人口と生産が拡大をはじめ。まず鎌倉時代後期から室町時代（1280-1450年）は、GDPは拡大したものの人口も拡大したので人口1人あたり GDP は微増にとどまったが、戦国時代から織豊政権期（1450-1600年）には GDP と人口成長率が加速し、人口1人あたり GDP も22%増加する。

そして、これらの所見をふまえたうえで、本節の最後に「世界史から見た日本の中世」と題して国際比較がおこなわれる。まずイングランドは、1280年ごろまでは日本の水準と大差はなかったが、ヨーロッパを襲った黒死病が大幅な人口減をもたらしたことで人口1人あたり GDP は日本の約2倍まで跳ね上がった。この差はその後しばらく広がることはなく、それが急拡大してゆくのは17世紀半ば以降という。次に中国・インドは、当初は日本の水準より高かったが、両国はその後も停滞しつづけたために次第にその差が縮小していったとする。1280年以降の日本の緩やかな成長は、大陸からの技術導入は可能でありながら外敵の侵入はうけにくいという日本の有利な地政学的条件に加えて、中世集落の形成や戦国大名による一円支配など中世以降の経済社会制度の変革が寄与したのではないかと推定している。

以上が序章第1節「成長とマクロ経済」の内容であるが、そこに基礎的なデータを提供しているのが本論の第1章「人口と都市化と就業構造」という関係になる。続く序章第2節「政府の役割」と第3節「所得と資産の分配」では、中世経済を基礎づける所有権の構造や法制度との関係、荘園における荘園領主・地主・耕作者間の所得配分や金融業の役割等が概観されるが、これに対応するのが本論の第2章第2節「中世の金融」と第3章「農民の定住化と土地の証券化」ということになろう。一方、第2章第1節「中世貨幣」と第4章「中世の諸産業」、第5章「中世の交易」は、序章との対応関係が薄い部分だが、このうち第2章第1節はこの四半世紀のあいだに中世経済史のなかでもっとも著しい進展をとげた分野である貨幣史に関する概説である。逆に第4章と第5章は20世紀のうちにほぼ研究が固まり、近年はあまり目立った動きがみられなくなった分野だが、わずかに第4章の鉱業だけは、近年鉛インゴットなどの考古資料の出土があいつぎ、分析科学との連携によって今後大きな進展

が期待される分野である。第4章が紙数の半分以上を鉱業に費やしているのは、いささかバランスを欠いているとはいえ、このような研究の現状を反映したものといえよう。

さて、以上駆け足で本巻の内容を紹介してきたが、文学部系研究者の一人である評者にとって、後半の各章が比較的なじみ深く、いわば想定内の内容であるのにたいし、前半、とくに序章については、これまでこのような観点でこの時代に切りこんだことはなく、とりわけ第1節の「成長とマクロ経済」で試みられたGDP推計にいたっては、そもそも中世においてそのようなことが可能であるとは思っていなかったから、実際の成果はどうあれ、試み自体はたいへん刺激的であった。少しだけ個人的感懐を述べさせてもらおうと、同推計は、物価と賃金に関するデータを主にBassino et al. (2010)に依拠しているが、さらにそのBassino et al. (2010)が全面的に依拠している歴博DB「古代・中世都市生活史(物価)」は評者を研究代表者とする共同研究チームが作成したものである。せっかく作成したDBがようやく有効に活用されているのを見て、しばし感慨に浸った次第である。

さて閑話休題、このGDP推計をみて、評者がふと思い出したのが映画「ジュラシックパーク」である。この映画の恐竜たちは、琥珀に閉じこめられた蚊の化石から恐竜の血液を採取し、そのDNAから復元されたという設定だが、そのなかに恐竜のDNAの欠失部分を、配列が恐竜とよく似たカエルのDNAでつないだという話が出てくる。本巻のGDP推計をみてまっ先に思い出したのがこのエピソードであった。中世史料から直接導かれた数値を恐竜のDNAとするなら、この推計は大半が他の時代から導かれた比率や関係式、いわばカエルのDNAだということである。これをどう評価すべきか。たとえ大半がカエルのDNAだったとしてもとりあえず恐竜らしきものが復元できたことの意義を評価すべきか、それともそのようなものはいくら似ていても恐竜ではないとみるか、意見が分かれるところだろう。

次はその成果にかかわることだが、長期的にみたことにより、どれほどすごいことがわかったかといえ、結局のところ、ときどき停滞はあったものの、長期的にみれば確実に経済成長をとげていたという誰もが想像できるごく平凡な結論にすぎなかった。また、統計学は現時点では独自の説明リソースをもたないとみえ、変化の説明はもっぱら従来の日本史の通説に拠っている。たとえば、室町期の人口増については、集村化が土地利用の安定化と集約化をもたらしたためと説明され、戦国期から織豊政権期に経済成長率が加速することについては、流通経済の発展や、戦国大名の領国支配の進展にともなう生産拡大が原因と説明されるたぐいだが、いかにも教科書的でつまらない。このへんはもう少しどうにかならなかったかとも思うが、将来的には日本史の通説を逆に塗りかえるような、そのような成果を期待したいものである。

評者の個人的関心をいえば、長期理論の重要性はもちろん重々承知しているつもりだが、評者をより強く惹きつけ、そして実際に評者がこれまで主に取り組んできたのはむしろ中期

的な変動ともよぶべき、中世後期から近世初期にかけての3~400年間ほどの変化である。このスパンで歴史をとらえると、長期的視野からはこぼれ落ちてしまうさまざまな起伏があらわれる。たとえば中世の代表的な手形である割符が16世紀初頭に消滅してしまうこととか、16世紀後半までに年貢の代銭納制が放棄されたことで、それにささえられていた中世市場経済もそのままのかたちでは近世につながっていかなかっただろうといった側面がみえてくるのだが、堅実な経済成長をうたう長期理論は、このような細かな、しかし興味深い多くの起伏をブルドーザーのようにならしてしまう結果を生む。統計的手法では劇的な変化や複雑な社会現象がとらえきれないという問題はイギリスの産業革命研究でも指摘されているが（長谷川貴彦『産業革命』山川出版社、2012年、p16）、それと同じことがどうやらこちらでもおこっているように感じられるのである。

もうひとつはやや細かい問題になるが、せつかく第2章第1節に貨幣史に関する概説を置きながら、GDP推計に近年の貨幣史研究の成果が反映されていないことである。すでに触れた現象でいうと、中世後期の米換算賃金が14世紀後半と15世紀後半から16世紀後半という二度の米価下落期に上昇しているのは、中世後期の賃金が錢建てで一定であり、ときどきの米価に左右されない硬直性を特徴としていたからにはほかならない。同じく16世紀半ばに米換算賃金率が異常に高くなるというのも、上記の特徴に加え、精錢流通量の漸減によって錢価格が長期的な上昇傾向にあったためと考えられる。つまりいずれも貨幣的要因によって引き起こされた可能性が高いのであるから、それをいわゆる需要側からの農業生産量推計の根拠として用いることには慎重を要するだろう。

このような中世賃金の硬直性については上述の歴博共同研究の成果報告書（『国立歴史民俗博物館研究報告』113集、2004年）でも問題にしているが、Bassino et al. (2010) は、DBは参照しているものの、成果報告書のほうは参照しておらず、その不備を本書も引き継いだ格好である。その他、評者の専門とも重なる貨幣史や金融史についても注文をいえば切りがないが、すでに紙数も尽きたのでまたの機会に譲ろう。

以上、書評の責務として縷々苦言も呈してはきたが、全体的にはむしろ感心させられた点が多いことを申し添えておきたい。たとえば、網野善彦の「無縁」論の意義を正當に評価し、正面からしっかりとうけとめている姿勢などは、日本史の研究者は大いに学ぶべきだろうし、マクニールの疫学理論を援用することで、これまで肯定的な文脈で語られることの多かった対外交渉の負の側面をあぶり出した意義も大きい。農業生産と家族制度との関係を丁寧に読み解いているところなども好感がもてた。そして何よりも経済学部系研究者と文学部系研究者が本書の執筆を通じて交流を深め、互いの方法論や術語に触れたことは、将来に向けてかけがえのない経験になるだろう。このようなすばらしい場を演出した編者たちのセンスにも拍手を送りたい。